

1月総評

西躰 かずよし

雪の声集めて 熱気球

松本 幸大 埼玉県

熱気球は雪の声を乗せて飛んでいるのだろうか。
熱気球は雪の声を集めて飛ぶのだろうか。
雪の声はまるで願いごとのようで。
雪原に浮かぶ熱気球を思う。

ゴールシーンだけを見ている
月曜朝のマクドナルドで

小宮 颯人 東京都

「ゴールシーンだけ」という一節に惹かれる。テレビやニュースで見るのは、ほんの一部分ではないから。そしてそのほんの一部分だけを月曜日のマクドナルドで見る矮小な僕たち。この作品を読んでほっとした気持ちになるのは、そうした矮小さを許してくれるような気がするからかもしれない。

うつくしいものを
わすれてしまっても
曾祖母はまだ海を見ている

うたた 岡山県

多くのことを忘れても、離れることが出来ないような場所があるのかもしれない。生きていく限り世界のどこかに痕跡があって、世界のどこかと関係があって、それを全部消してしまえるならば、それはとても美しいことに違いないけれども、それはどうやっても出来ないことなんだと思う。まだ海を見ている理由は誰にもわからないけれども。

泣いている天使を見た。すべての
黒がオレンジの筈だった夜の事。

志内 悠真 京都府

オレンジの筈だったということは、既にオレンジではないのだろう。そうである筈のことがそうでなくなったとき生じる不幸せ。たとえば、帰宅する筈だった子ども。結婚する筈だった恋人。いろいろあるけれども「すべての黒がオレンジの筈だった」という不幸せは、それらとは異なる水準のものを表現しているように見える。たとえば人が人であること不幸せ。原罪のようなもの。

くらやみがまだ友達でいてくれる
もうすこしだけよふかしをする

橋口 諒介 東京都

くらやみと友だちでいられる時間は人生のなかでは限られるかもしれない。もうすこしだけ夜更かしをするというささやかなぜいたく。そうしたぜいたくを幸いというのは言い過ぎだろうか。本を読んだり、手紙を書いたりする明け方までの時間。

精神科の窓から見える
自転車の前も後ろも
子を乗せるひと

うろ仔 北海道

病棟から見える何気ない光景。その光景と語り手に置かれた場所とのどうしようもない差異。すべては与えられたものでしかない。それでも、自身の置かれた世界について問うことは許されている。書くことは問うことに近いということが作品からは伝わる。

芒野にセーラー服の浮いている

玻璃 愛媛県

芒野とセーラー服との色の鮮やかなコントラスト。
浮かぶセーラー服はまるで芒野に溺れているかのように見える。
時に世界は現実味を失って、僕たちの手からはなれてゆく。

天の川 貸出欄に父の名前

まちりこ 埼玉県

貸出欄に父の名前を見つけた時、登場人物はかつての父親と出会ったのだろう。父もまたそこに足を運び、そこで本を借りた。作品のはじめには、遠くの父親の姿と呼応するかのよう
に天の川が置かれる。

こんぺいとう
水に溶かせば虹の匂い

長谷川柊香 宮城県

虹の匂いは無臭のような気がする。虹の匂いと思っていたものは実は存在しなかったと
いうようなことがあってもいい。こんぺいとうが水に溶けるまでの短いようで長い時間。そ
の時間だけが描かれる。

あなたを抱いたまま
海を見ている
祈りの形はまるいと思う

桜望子 山形県

祈りというのは欲望の極北にあるのかもしれない。そこになしみや嗚咽が混ざるくら
いに。その形をまるいと思うのは、すでに世界と和解しているからなのだろう。世界との
和解は、あなたを抱いていることでなされたのかもしれない。